NY エッセイ 86

中瀬有紀

家族と仕事

冬の朝

仕事帰りの地下鉄で、男性の背負うリュックサックに半身入れられて同乗している大きなシェパード犬に出会いました。なんとも窮屈そうでしたが、犬もその飼い主も一緒に行動していることが幸せそうで、彼らのほのぼのした雰囲気は周りの乗客を和ませていました。ニューヨークの地下鉄はペットの犬を連れてきてよいとしていますが、乗車中は終始ペットを籠やキャリーケースに入れておかなければいけないという条件があり、小型犬ならともかく、中大型犬の飼い主は試行錯誤しています。飼い主の中には大きなバッグの底の四つ角に穴を開け、犬の足4本をそこから出して「バッグ」という名の洋服を着せているという、とてもクリエイティブな飼い主もいます。アメリカ人のペットや家族に対する愛情とその表現方法はとてもユーモアに溢れています。

舞台・テレビ照明に関わる人は、テクニカルリハーサル期間やツアー・地方公演で自宅から長期間離れることが多いため、単身者は特にペットを飼わないようにしている人が多いですが、どうしても動物を飼いたい照明家の間では、比較的手をかけずに飼える猫が人気です。アメリカ人にとってペットは家族同然で、犬を連れてリハーサルに来ている監督や出演者の方々をたまに見かけます。先日関わった作品では、出演者のうちの1人が小さな犬を顔合わせの日から連れてきていました。人懐っこくリハーサル1日目から稽古場でみんなに挨拶して回っていたその犬は、袖で出待ちしている飼い主の後ろでスタンバイし、飼い主と一緒に舞台へ出て行きます。お腹が減ったらトコトコと舞台監督のところへ向かいお菓子をおねだりしているその犬を見て、こんなにも犬に寛大な現場もあるのだと感心しました。そうは言っても、すべての現場に同じようなことが言えるわけではありません。音と光に対してとても繊細な演出家と仕事をしたとき、舞台稽古中に客席の一番後ろのドアから犬を連れて静かに入って来た関係者に対し、その演出家は舞台を見つめたまま「犬を劇場から出せ」と言いました。

職場に幼い子どもを連れてくることに関しても同じような状況だと言えます。私の周りの既婚でエンターテイメント制作に関わっている夫婦の多くは共働きです。都会に住むアメリカ人は親から離れて生活していて、親の協力を得るより夫婦間の育児と家事の分担を徹底することで子育てとビジネスの両立を図っています。そんな彼らにとって、子どもを職場に連れてきて良しとしている事務所はとても働きやすい環境だと聞きました。時には夫婦両方が忙しく、託児所の営業時間やベビーシッターの事情、また経済的な理由により常に子どもを誰かに預けることが不可能だからです。しかし、大事なクライアントとの商談や、照明の設営現場に子どもを連れてくることはリスクで、たとえ事務所でのデスクワークのみだとしても、子どもの面倒をみたり子どもが騒いだりして親も周りの人も仕事に集中できないという欠点が指摘されます。給与を支払う経営者側としては、勤務中、特に過渡期は子どもを連れてこないで仕事に集中してほしいというのが本音のようです。

地方公演で一緒に働いた装置家の友人は、ニューヨークからの飛行機移動に愛犬を連れてきていました。キャリーケースに入った彼女の小さな犬は、機内の座席下で一度も吠えることなくおとなしくしていて、慣れたものです。ドイツとアメリカで仕事する彼女は、両国間を飛行機で移動するのが日常ですが、ドイツに行くときは犬を連れていけないと言いました。それは長時間の飛行だけでなく、ドイツの劇場におけるデザイナーと施工者の関係が影響しているそうです。彼女曰く、ドイツに比べアメリカはデザインと施工の仕事分担が明確なため、アメリカの現場のほうが犬の面倒をみる余裕があるとのこと。家族と仕事の関係は、場とその環境によりけりですね。